2014年
6月12日
木曜日

ポーランドで考えたこと

藤井和夫　教授（西洋経済史）

２０１４年６月に研修でポーランドを訪れる機会があった。ＥＵの一員としてのポーランドのダイナミックな変貌ぶりが印象的な滞在であった。日本に帰国する前夜に、首都ワルシャワで財布をなくした。鉄道の駅からホテルまでタクシーで移動した時、同乗者に小銭を借りて支払いを済ませたあと、うっかり助手席に財布を置き忘れてしまったのだ。すぐに気づいてタクシーを捜したが、もう走り去ったあとだった。運転手が次の客に急いで向かおうとしていたため、レシートももらっていない。

まあ無駄だろうと思いつつ、それでもひょっとしてということもあろうかと、ホテルのフロントに事情を話したら、その晩のうちに駅で営業していた無線タクシー３社を確認して財布を捜すように連絡してくれた。次の日の朝はタクシー各社から何の連絡もなく、すぐにカードを止める手続きをした。現地通貨の現金１万円ほどと、一緒に入れていた日本のＪＲのカード定期がもったいないと思いつつ。

その後ワルシャワ滞在最終日の用件を済ませてから空港に向かうためにホテルに戻ってきたら、タクシーの運転手から連絡があったという。ただし、その日は彼の出勤日ではなく財布をホテルに届けるのは無理だという。届けられた財布をあとで日本に送ることはできないかとホテルに頼んでみたが、断られた。直接、教えてもらった運転手の携帯に何度か電話をしても通じない。やむを得ず、ワルシャワ在住の知人に受け取りと送付をお願いして帰国の途についた。

帰国後すぐ、知人から財布を受け取ったが、カード類や定期券は無事で、現金はなかった、と連絡があった。「しかたがないですね」と知人は言い、「カードが不正使用もなく無事で何より」と、こちらも胸をなで下ろした。

かつて滞在していた社会主義時代末期のポーランドであったら、タクシーに財布を忘れた時点で直ちに、財布が戻ってくることは完全にあきらめていただろう。（当時、カードというものはなかった。）ポーランドはまだ貧しかったから、だけではない。国営の建設会社で働く労働者は、終業後に自分が管理する会社の資材を利用してサイドビジネスの請負工事に精を出し、国営商店の販売員は、流通に乗りにくい貴重な食品や日用品を、家族や知人に回すためにデスクの下に隠していた。社会主義計画経済の下で、国営企業の倫理感と、個人の倫理感が結びつきにくい時代であり、置き忘れたものは、消える社会だったのだ。

ホテルのフロントがタクシー会社を探して連絡してくれ、財布とカードは戻ってくる今の時代から振り返れば、当時のポーランド人が、国民の気質として不誠実であったのではない。ビジネスの倫理や職業上の個人の責任などというものは、間違いなくきわめて社会的な、そして時代の基礎の上に乗っかっている。翻って思うに、日本人の心遣いや親切が、日本の「おもてなし」として高く評価されているという。それが、日本人に備わった民族的な気質だという言われ方が、ちょっと気になるポーランドでの体験であった。■